―特集〔国内・国際災害医療と日本医大：令和６年能登半島地震とガザ紛争対応報告（12)〕―

令和６年能登半島地震における看護師の活動

髙橋　聡子
日本医科大学付属病院高度救命救急センター

はじめに

2024年１月１日に最大震度７を観測した能登半島地震における災害支援活動として，１月２日から24日までの期間に，日本医科大学付属病院から各災害医療チームの一員として７名の看護師を派遣した．能登町小木地区の避難所内に設置された救護所で，避難所の衛生管理と被災者の健康被害の最小化を目的に活動した．活動の時系列に沿って被災地で行った看護活動について報告する．

1. 全日本病院医療支援班（AMAT：All Japan Hospital Medical Assistance Team）先遣隊としての活動（1月2日～1月4日）

１月２日午前中に，AMAT先遣隊として被災地へ出動することが決定し，同日16時に付属病院を出発し，22時40分に七尾市立公立病院に到着した．主な活動としては，被災地内の障害者福祉施設，能登町小木地区の避難所で医師と協力し，基礎疾患を持っている方のメディカルチェックを行った．また，約700人が避難をしている避難所の衛生状況の情報収集とアセスメントを実施した．

被災地の被災状況も分からず，最終的な行先も決まっていない中での活動であった．避難所には多くの被災者が身を寄せており，感染症の発生や地震による外傷など医療ニーズが高い状況であることが明らかになった．上下水道が使用できないため，避難所の衛生管理など避難所運営支援も必要な状況であった．被災地の医療・保健衛生など全体的なアセスメントは不十分であったが，まずは限られた医療資源の中で，目の前の患者に医療提供をすることを優先した．継続支援の必要を感じ，翌日にはAMAT ２次隊の派遣要請を行った．

2. AMAT２次隊としての活動（1月3日～1月8日）

１月３日に付属病院を出発し，４日に能登町小木中学校避難所に設置された救護所で１次隊より引継ぎが行われた．避難所内ではCOVID-19が発生し，その後発熱者が増加したため感染拡大防止策を講じた．具体的には感染症症状がある方と，それ以外の受診希望者の動線と診療ブースを分け，接触しないよう工夫を行い，避難所内では定期的な二酸化炭素濃度測定と換気を実施した．COVID-19陽性者を避難所内で隔離し，ナースコールの配置や検温を行い，異常の早期発見に努めた．その他にも医療施設への患者搬送や，既往に精神疾患を有する避難者への対応など，多岐にわたる保健医療活動を実施した．

感染症対策や限られた医療資機材を用いて医療提供を行うには，臨機応変な対応が求められた．また，被災者に寄り添いコミュニケーションをとることで，大変な状況であるが，復興に対する希望を共有しながら活動を行うことの重要性を感じた．

3. 東京都日本医師会災害医療チーム（Japan Medical Association Team；JMAT）JMAT１次隊としての活動（1月9日～13日）

前の隊よりCOVID-19へ罹患した避難者が増加しているとの情報があり，感染拡大防止と罹患者の重症化の早期発見，生活援助が主な業務となった．避難所である中学校の２階と３階の教室を男女別の隔離室として使用し，１日３回の回診に加え，頻回に巡視ラウンドを行い罹患者の状態把握に努めた．巡視ラウンド時には検温の他，食事摂取量や飲水量を確認し，日常生活動作に介助が必要な方に対し，食事介助や口腔ケア，内服支援などの介入も行った．また，活動量が少ない療養者には深部静脈血栓症を予防するために臥位で下肢の運動を指導し，歩行可能な方には隔離スペース内を歩行するよう促した．しかし，COVID-19の罹患者が25名まで増加し，看護師１人で介入を行うには限界があるため，療養者にも協力を得ながら環境整備やトイレ周囲の衛生環境改善を計った．避難所全体の衛生管理と避難者の健康管理を行うためには，マンパワーが必要であり多職種やボランティアの方と協力してゆく必要があると感じた．

4. JMAT 2 次隊としての活動（1 月 12 日～15 日）

引き続き感染拡大を防ぐために，他の災害派遣チームと協働して避難者が健康を維持しながら避難生活を継続できるよう支援を行った．長野県災害支援ナースが避難所に派遣されたことから，COVID-19 隔離室での日常生活支援と避難所内での生活不活発病および深部静脈血栓症（DVT）予防など，役割分担が可能となった．COVID-19 罹患者で基礎疾患があり今後重症化のリスクが高い被災者 4 名については，医療調整本部を介して入院や広域医療搬送を行い，災害関連死の予防に努めた．能登町は高齢化率 50％であり，日常生活において支援や見守りが必要な方が多く，地元保健師や DWAT，DHEAT と情報共有を行い福祉避難所の早期開設を提案した．避難所救護所が閉鎖しても地域住民が安心して医療を受けられるよう，地元医療機関とも連携し，災害医療チームの支援を受けながら診療ができるよう調整を行った．

今回の活動を通して住民が被災地内で健康維持ができるよう，地域医療を支えることの重要性と，質が担保された息の長い支援の必要性を感じた．

5. JMAT 3 次隊としての活動（1 月 15 日～18 日）

発災から 2 週間が経過していたが，断水が続いており，避難者数は 150 名前後で経過していた．現地での活動は主に発熱相談や COVID 陽性者への対応が多く，感染拡大防止と療養スペースの整備を継続して行った．併せて隔離療養が必要な場合でも，自宅損壊により帰宅が難しい被災者も多数いたため，病状や自宅損壊の程度に応じて療養場所の選定や調整などを行った．災害派遣精神医療チーム（DPAT：Disaster Psychiatric Assistance Team）や JRAT（Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team）の介入が開始された時期でもあり，複数の医療支援チーム間で情報共有を行い，支援に対する共通認識を持ちながら活動にあたった．避難所ごとに医療や人員，支援提供に大きく差があったことが非常に印象深かった．この差を解消するために避難所責任者や DMAT 本部および JMAT，地域の診療所，行政で情報共有と連携を密に行うことで，医療サポートが十分でない避難所からも安心の声があがっていたことを聞き，限られたリソースを適切に分配することの重要性を認識した．

今回の活動を通して，災害のフェーズに合わせた様々な医療支援チームや介護・行政と連携し，地域や被災者に寄り添いながらも被災地のレジリエンスを高めるような関わりが重要であると感じた．

6. JMAT 4 次隊としての活動（1 月 18 日～21 日）

JMAT 4 次隊としての主な活動は，避難者の健康状態と服薬状況のリスト化と福祉避難所開設に伴う衛生環境の整備，福祉避難所の巡回診療の確立であった．避難者の方から話を聞く中で，食物アレルギーのある子供への対応や，女性特有の健康問題についての相談を受け，年齢に関係なくそれぞれに健康問題を抱えているものの我慢している人が多い印象を受けた．福祉避難所における感染症対策では，使用できる物資に制限がある中で，対応を検討する必要があった．また，運営スタッフも災害派遣チームとして来ており数日ごとにチームが入れ替わるため，質が担保された継続的な支援を行うことの難しさを感じた．

フェーズによっても必要とされる支援は変化していくため，一方的な支援とならないよう，地域の方や避難者の話を聞きながら信頼関係を構築していくことが大切だと感じた．

7. JMAT 5 次隊としての活動（1 月 21 日～24 日）

避難所救護所を閉鎖する撤収隊としての活動を実施した．活動内容は，主に福祉避難所の巡回と避難所の健康相談室として活動を続ける災害支援ナースへの引継ぎであった．また，活動の中で地域医療を担う医師の往診に帯同し，外来診療から在宅医療まで幅広く活動しており，地域医療を担う医師の負担軽減が必要だと考えた．災害支援ナースへの引継ぎとしては，感染症患者の早期発見と隔離対応について継続支援を依頼した．また，福祉避難所での感染予防策を福祉支援チームの方々と共有した．

医療ニーズや災害のフェーズが変わっていく中で，それぞれにニーズに対応した関わりが必要であると感じた．

おわりに

被災地のフェーズに応じた被災者のニーズを抽出し，被災地内での健康被害が最小限に抑えられるよう，それぞれが様々な災害医療チームと連携・協働しながら被災者に寄り添った支援を実施することができた．庶務課をはじめ，臨床検査部，栄養科などロジスティック部門の方々の支えがあり，より有益な支援を実施することができ，後方支援の重要性を改めて認識した．

今後も被災者に寄り添った支援が提供できるよう，院内各部署と連携しながらスタッフの育成および，派遣での学びを共有してゆきたい．

能登半島地震支援へ派遣された災害医療チームの構成と看護師名簿

派遣期間	災害派遣チーム	チーム構成	看護師氏名（所属　※派遣当時の所属）
1/2～1/4	AMAT 1 次隊	医師：2 名 看護師：1 名 救命士：1 名	村松　暖香（高度救命救急センター）
1/3～1/8	AMAT 2 次隊	医師：2 名 看護師：1 名 調整員：1 名（薬剤師） 救命士：1 名	井出　将司（高度救命救急センター）
1/9～1/13	JMAT 1 次隊	医師：1 名 看護師：1 名 調整員：1 名（放射線技師） 救命士：1 名	福嶋　宏（中央手術室　主任看護師）
1/12～1/15	JMAT 2 次隊	医師：2 名 看護師：1 名 調整員：1 名（薬剤師） 救命士：1 名	高橋　聡子（高度救命救急センター　看護係長）
1/15～1/18	JMAT 3 次隊	医師：2 名 看護師：1 名 調整員：1 名（薬剤師） 救命士：1 名	小村　彩乃（外科系集中治療室）
1/18～1/21	JMAT 4 次隊	医師：2 名 看護師：1 名 調整員：1 名（放射線技師） 救命士：1 名	京谷　夏実（高度救命救急センター）
1/21～1/24	JMAT 5 次隊	医師：2 名 看護師：1 名 調整員：1 名（薬剤師） 救命士：1 名	竹洞　友香（高度救命救急センター）

（受付：2024 年 4 月 7 日）
（受理：2024 年 7 月 11 日）

日本医科大学医学会雑誌は，本論文に対して，クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際（CC BY NC ND）ライセンス（https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/）を採用した．ライセンス採用後も，すべての論文の著作権については，日本医科大学医学会が保持するものとする．ライセンスが付与された論文については，非営利目的で，元の論文のクレジットを表示することを条件に，すべての者が，ダウンロード，二次使用，複製，再印刷，頒布を行うことが出来る．